



Title	春季探勝會
Author(s)	小沼, 量平
Citation	懷徳. 1924, 1, p. 33-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88690
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

冬季茶話會

大正十三年二月十一日、紀元節の佳辰を卜し、懷德堂講堂に於て、堂友會冬季茶話會を開催せり。先づ小講堂には、中井家秘藏の、履軒先生遺著、七經逢原七經彫題の原本數十冊と、辛丑壽卷と題する、竹山先生の萱堂七十壽筵の際、社中門人、數十名の賀詩祝文を裝緝したる卷物を陳列して、來會者の展覽に供し、定刻午後一時に至るや、擊析の聲に應じて着席せるもの、會長、松山先生、名譽會員、稻東猛、財津愛象、中井

木菟鷹三先生、其他堂友四十餘名にして、幹事、岡田玄碩開會の挨拶を述べ、次で松山會長「宋學の先驅としての梁肅」と題する講演、名譽會員、中井先生の祝辭あり、夫れより茶を啜り、菓を啖ふて、互に談笑しまれ堂友今西茂喜文字傳來期の所感を述べ、更に夏季の茶話會には、堂友各自所藏の同時代先儒の卷軸等を持ち寄り展覽すべきことなど申合せ、和氣霽々の裏に午後四時散會せり。

春季探勝會

大正十三年三月二十一日春季皇靈祭の日を選び堂友會春季探勝會を催したり當日午前七時三十分大阪驛に集合せるもの松山會長以下二十一名八時發急行列車にて京都に向ひ伊藤仁齋先生の舊址古義堂に至る堂は屢回祿の災に遭ひ舊容復た觀るべからざるも書庫獨巋然として舊時の面目を存せり先生の裔孫伊藤顯也氏堂友一行の爲め特に其の邸宅を開放して第一陳列場となし滋

小沼量平

野小學校を第二陳列場として戸田德治氏邸を第三陳列場に充て先世諸先生の遺著遺墨遺愛品等を陳列して一行を歡迎せられたり。遺著の重なるものは仁齋東涯蘭嶠三先生の手稿本及東所先生の編定に係る紹述雜鈔二十七種（先遊傳、詩經要領、估伴漫錄、集語鈔、古官、宮殿門考、宮室名號、閱史隨鈔、國事雜誌、考古雜編倭漢通信雜誌、朝鮮雜誌、鷄林軍記五卷、朝鮮諺文字

母、文章辨畧、雜雋手錄、肆言類雋、東牘套語、左詩熟語、須記詩選、明詩絕奇、東涯詩話、東涯談叢、姓林全書、五音五位口訣十例、避諱書、異名考、附三種朝野通載（上中下）、朝野通載續集（上中下）、朝野通載新集、當世詩林、當世詩林續編、當世詩林新編、時英文雋（上中下）時英文雋續編上、下、其の世に刊行せられざるものに東涯先生の易經古義、易大象解、讀易私說、讀易圖例、太極管見太極十論、蘭嵎先生の易憲章書、反正詩、古言古引詩則、讀禮記、春秋聖旨などあり雜鈔二十七種も亦然り尙ほ仁齋先生日札東涯先生日記古學紹述兩先生文集蘭嵎先生の詩文稿紹衣稿（六冊）などあり遺墨には仁齋先生を首として進齋、東涯梅宇、介亭、竹里、蘭嵎、東所、弘美諸先生のもの多數を拜觀するを得たり中に仁齋東涯蘭嵎三先生の書を合せたる一卷あり東所先生の跋尾面白ければ附記せん曰く古學先生之書從容正大如天運之自然也紹述先生之書溫潤端麗如造化纖悉之妙也蘭嵎先生之書才氣英發如勝地美景也今三先生之書非據書法而書法無不具蓋德義文然也可不謂古今之三絕哉と三先生の學問人格各其の書に發見す今是の評亦移して以て三先生の學德を

評すべきか伊藤家邸内に在る諸先生の神主を奉安せる祠堂に禮拜し伊藤戸田兩氏の款待を受け正午戸田邸を辭して太秦の廣隆寺に至れば住職清瀧智龍方丈鶴首して一行を待ち居られ先づ正寢に請じて茶菓を饗せられ次で寺史を説明せられたる後ち方丈親から案内して靈寶殿に至り國寶千手觀音菩薩其他數體の佛像及弘法大師真跡、足利尊氏安堵狀其他の古文書を拜觀し又特別保護建造物桂宮院に至り聖德太子手刻の如意輪觀音像を拜す夫れより講堂に至り上宮太子御自作三十三歲等身の尊像を開扉禮拜し一々方丈の説明を聽き四時同寺を辭して嵐山に向ふ是より先き三時頃より既に雨降り出したれば嵐山行の可否を衆議に諮りたるに一行皆な雨中の嵐山を眺むるも亦興趣多かるべしとて議立所に決したれば直ちに電車に駆け乗り、數分時にして嵐山停車場に着す先づ渡月橋に至り、橋上より小倉山、愛宕山を望めば峰巒重疊濛濛雨蕭々翠綠滴るが如く其の絶景得て云ふべからず、夫れより小倉山二尊院境域内に在る仁齋先生の墓を展せんとし逶迤曲折天龍寺を通過し數十階の石磴を攀躋して宇宙庵に登れば、庵の東方數十歩にして伊藤家の塋域に達す茲に仁齋、東涯東所

三先生の墳墓を禮拜し午後六時嵐山停車場發電車にて

一行皆な歸途に就きたり。

末吉家訪問

岡田玄碩

東成郡平野郷の地は府下に於いて最も古い歴史を持て居る地であつて、阪上田村麿の子孫と稱する七苗家のある者は今も尙歴として此地に住んで居る。昨年訪問して含翠堂並に懷徳堂關係の文書を拜見した土橋家も其一であつたが、此處に記す末吉家も亦七苗の一である。

四月二十七日、豫て井上正美君より依頼して同家の快諾を得てあつたので正午南海の恵比須停留所に集合松山、稻東兩先生、井上、野口、平野の三君に私と一行六名は末吉家を訪れた。この日井上氏の令兄森田博三氏及び三田猪太郎氏、山川七左衛門氏なども來て居られたが、午後三時過末吉家の親戚總代たる柏原仁兵衛氏が見たので末吉一郎氏と相談せられ始めて同家の文書並に書畫器物を拜見する事が出來た。

末吉家の事は既に川島氏の「徳川初期の海外貿易家」

其他に於いて發表されて居るから、今更繰り返す必要もない様であるが、當日拜見した文書も重に末吉家に關係あるものであつた。

末吉氏は其祖勘兵衛利方に至り信長、秀吉の恩顧を蒙つたが、天正十四年八月十七日には秀吉は勘兵衛を援擢して河内丹比郡西忍村の代官とし天正十六年九月には更に諸公事を免除するといふ様な文書がある。これより前に、勘兵衛は諸國廻船の業を營み、浪華より東海諸國に至つたから、天正十六年八月には當時三河岡崎の城主であつた徳川家康は之に朱印を授けて港灣出入の諸役を免じた。豊臣氏が亡んで徳川氏の世になつて、勘兵衛の子、孫左衛門吉康は遂に海外貿易に従事する様になり、慶長十三年七月二十五日には暹羅國へ渡航の計可を得て居る。孫左衛門は暹羅を始め、呂宋へ渡航したことも前後七回に及んだが、當時使用し